

第3回分収林地を含む森林管理のあり方検討委員会 議事要旨

- I 開催日時：令和6年9月11日（水）10時30分～12時00分
開催場所：兵庫県庁第3号館6階 第1委員会室

- II 出席委員（出席5名）
金澤委員長、大橋委員、上月委員、寺元委員、長谷川委員（WEB参加）

- III 議事次第
 - 1 開会

 - 2 議事
分収林地を含む森林管理のあり方検討委員会中間報告書（案）（資料2）
各委員から意見聴取（別紙1「主な発言等」参照）

 - 3 その他

 - 4 閉会

(別紙1)

主な発言等

●委員

- 全体的な目標林型を定めて整備していくこと、担い手を育成していくことについては賛同している。
- 目標林型を定めたゾーニングとその整備手法について、過去の知見を活かすべきである。
- 目標林型の設定や樹種の選定の前に各地域の気候風土にあった森林とは何なのかを把握することが重要であり、それを検討する具体的な手法についても言及すべきである。
- 奥山で長期間に渡り炭素固定に貢献する樹種として、早生樹が挙げられているが、早生樹がその役割を担うのは難しいと考える。実際は常緑樹の大木が自生し、その役割に貢献している。
- 植栽するという手法ではなく、幼木を保護してやるという手法でも良いかもしれない。様々な整備手法が考えられる。
- 重要なのは目標林型を具体的にイメージすることであり、そのためにどのような森林がふさわしいのか、過去の森林の様子や温暖化等今後の気候変動を踏まえて、人間活動と合致した森林がどうあるべきなのかを考える必要がある。
- モニタリングや森林整備と教育プログラムとの連携が出来たらよい。担い手を育てるのも大事だが、問題意識を持ってもらうことも重要である。教育プログラムを通じて将来意識や問題意識を持ってもらえたらよい。

●委員

- 一度人の手が入った森林はずっとある程度の管理コストが必要であることを明記すべき。
- 植栽樹種の検討例の一覧表について、項目や樹種の追加などより充実してもらえとなおよい。
- 目標林型へソフトランディングしていくには針葉樹を残しつつ目標林型へ誘導、整備していくことが大事と考えており、今回提言にある整備手法が良いのではないかと思う。

●委員

- 多様な管理主体として市町や林業経営体が挙げられているが、森林管理はそもそも森林所有者の責務であると考えてるので、その旨記述も追記すべきである。

- 解約後の分収林をどうするかという点で、特に分収林を整備、維持管理していくときの予算を確保する旨も記載すること。
- ワンストップ組織について、具体的な業務内容にも言及すること。
- 報告書の内容が針広混交林に偏っており、分収林地は全て針広混交林に誘導していくというような誤解が生じないように留意すること。

●委員

- とりあえずこの内容で走り出し、大学や研究機関との連携体制を整えながらPDCA サイクルを回していくということが大事である。
- 本委員会の主旨を超える話になるが、兵庫県はバイオマス発電施設が多く、他県に比べても明確な森林資源の活用戦略が重要と考える。発電だけではなく、プラスチックや工業原料など脱化石燃料部分の代替を担っていくこととなる。その中でより積極的にどのような森林を育成して木材を生産していくのかということ、さらに木材生産機能と公益的機能との両立のさせ方、森林利用をするうえで人材育成の方法、都市住民の森林とのかかわり方等の検討を進めてほしい。
- 本報告書を中山間地域の社会構造の戦略を考えていく上での助走と位置付けてほしい。
- PDCA サイクルを回していくことによる森林整備の具体的な見直し手法や、PDCAのスケジュール等の方針について言及をすべき。

●委員

- 公益的機能の発揮と今までの保安林の目的と合致している一方で、保安林というワードが入っていない、今までの施策の流れを踏まえたうえでの報告書であることをアピールすべきである。
- 多くの方々、特に都市住民に関心を持ってもらえるよう、地球温暖化や炭素固定、SDGs という点もしっかりと書き込んでほしい。
- 過去の知見を活かすことが大事であり、森林林業技術センターが蓄積してきたこれまでの時間的な流れも盛り込むべきである。

●委員

- 森林整備後のモニタリングについて県立大学もぜひ協力したい。
- 信州大学の AI を活用した架線集材技術の開発等、最先端の技術開発している研究室もある。将来的にネットワーク研究等で協力するなど研究部門の活性化をしていきたい。

●委員

- 林業が儲からない状態が元凶にあると考える、儲かる樹種の研究をしてほしい。1本あたりの取引値段が高く、量の確保も出来る樹種など。

●委員

- (儲かる林業とするには) ある程度のまとまった木材の量が継続的に出荷できる方が良く考える。

●委員

- 私はトラック1台程度まとまった材があればそれを売ればよいと考える。
- 病虫害のリスクという点でも早生樹は有利であるということ以外に現在のスギヒノキ材が1万円/m³などの状況ではどうしようもない、3万円/m³、10万円/m³といった材価にならないと夢が持てない。

●委員

- 木曽ヒノキはウッドショック時に3万円/m³ や4万円/m³ で取引されていた。ブランド化までは叶わなくても、兵庫県で生産される木材も知名度を上げて売っていく戦略は出来ないか。

●委員

- 林業(木材生産)の分野は節がないもの、通直なもの、年輪が密なものなどといったいい木を生産することを考えるが、林産(木材加工)の分野は、生産された材をどう使えばいいか、と考えている。

●委員

- 木目の良いものは付加価値が高いと考える。ミズナラなど食品(ウイスキー樽)に使えるものは今後も有効だと思う。ケヤキは昔は非常に価値があったが、今は需要が減った。そのような需給のリスクを減らそうと考えると基本的に短い期間で育つ木が無難と考える。ただ奥地でそれを求めてもどうしようもない。そのバランスを考える必要がある。リスク分散としてはスギヒノキ以外に多様な樹種を植えることが有効になると考える。

●委員

- 林業は大量生産しないと売れないということが今も昔も変わっていないが、現在はスマート技術で材の性質等を判別し土場で仕分けできるようになり、大量生産と少量多品目の両立が可能になったと考える。

- 海外だと家具材等で小さい製材工場でいい材だけを丁寧に少しだけ引くという経営が大きな製材工場のある町のすぐ隣で成立している。その両立を目指すことが、中山間地域の人が現金収入を得られることにつながる。大量生産だけでは林業従事者は都会から通うという形態にしかならず、コミュニティに発展していかない。
- 森づくりは数十年かかる。木材生産を目指した結果が拡大造林の失敗であり、生産された材をどう使うかが重要になる。
- AI を活用したグラップルによる架線集材やハーベスタでのヤング率による材の仕分けといった、土場で材の機能性、材質、曲がり等を評価する体制構築が林業 DX やスマート林業化に期待されている部分であると思う。

● 委員

- フィンランドでの研究では公益的機能の高い森林とは何か、単層林と複層林はどちらが良いのかという議論があった。その中で1 樹種の森林と3 樹種の森林では3 樹種の方が CO2 固定機能高いという結果が出ている。日本の森林はその比ではない樹種数の森林が成立する地域である。ちゃんと整備すれば機能の高い森林に誘導することができる。そのあたりの基礎的なデータは過去に事例があると考えられる。過去を知って、利用し、過ちを繰り返さないこと、その先のデータを収集することが大事だと考える。